

上写真／アレppoにあるダル・シファ総合病院に担ぎ込まれる負傷者。政府軍の空爆や迫撃砲による攻撃は市民をも巻き添えにする。また戦闘地域から搬送されてくる自由軍も多い。
下写真／アレppoのアッシャル地区。住民の大半が逃げ出し、戦闘により家は破壊され、人の気配もほとんど感じられなかった。



戦火のなかのシリア

アレppo



医師をも標的にする政府軍の無差別攻撃

首都ダマスカスにつづく自由シリア軍による蜂起で、今年7月から戦火のなかにあるアレppo。10月23日から29日まで、筆者が潜入した同地では、医師も政府軍の攻撃の標的だ。

写真／文 桜木 武史



が何度かあるという。それでも彼は病院に寝泊りしながら、担ぎ込まれる負傷者の治療に当たっている。

「医師の仕事は人の命を救うこと。私がいることで助かる人々がここには大勢います。身に危険が及ぼうと、私は一人の医師として最善を尽くしたい」

彼の声は力強い響きを持って私の耳元に届いた。しかし、人員不足と老朽化した医療設備では補い切れない人の命がある。私がこの病院に滞在した五時間余り、二名の患者が息を引き取った。どちらも砲撃により重傷を負った一般市民だった。

シリア全土での死者数は英国に拠点を置く「シリア人権監視団」の報告によれば、一二月末の時点で四万人を超えた。特に八月以降は一日平均一五〇人近い人々が命を落している。それでも懸命に働く医療スタッフにより命を取り留めている人々もいる。

私が滞在してから約一カ月後、十一月二日、ダル・シファ総合病院が政府軍によって空爆された。亡くなった四〇名以上一般市民の中にオスマンと共に働く医師も含まれていた。空爆される寸前まで彼は負傷者の治療に当たっていた。

医師であるオスマン（三〇歳）の表情は厳しい。彼はアレppoが戦火に包まれてから三カ月以上も休みなく働き続けている。「医師は政府軍にとって格好の標的なんです。なぜならわれわれは、市民はもちろん自由軍の手当ても行なっているからです」病院が面している通り一带は集中的に空爆の被害にさらされている。病院にも着弾したこと

さくらぎ たけし・フォトジャーナリスト。戦闘が国際問題化した三月にもシリアで取材。